

# 京童 インタビュー

思いきって色々聞いてみよう！

## 西川禎一おひとり座 編

答えてくれた人：西川禎一さん

インタビュアー：神門康子（人形劇の会マアル）、くぬぎ森子（劇団虹色どんぐり）  
坂下智宏・長谷川友香・千蒲誠也（人形劇団京芸）

### 人形劇団京芸の創立メンバーでもある西川さんですが、なぜ人形劇の道へ？

実は、人形劇なんて全然やりたくなかった。当時は役者で通じない奴が人形劇やってるといふ考え方があって、ひとつの演劇として認められていなかったんです。僕も人形劇を抜け出して、いつかは芝居をやろう！なんて考えていた。でも川尻泰司さん（故川尻泰司氏、人形劇団プーク元代表）と出会って、人形劇という芸術がどんなにすごいものか教わったんです。それから人形劇にとり憑かれました（笑）

人間の役者が出来ることを全部出来て尚且つ、人形で芝居が出来るのが人形劇の役者。新劇に出てくれと言われれば出れる技量がある。新劇の役者よりオレのほうが一枚上だと思ったりね（笑）

### 人形劇団京芸から独立されて「おひとり座」を立ち上げました。なぜ独立を？

京芸で、大きな舞台でライト浴びて花束とかもらって、出世したような気持ちになったりしたけど、小さい舞台より大きい舞台が立派かというところ、そうじゃない。大きい舞台のアンサンブルも嫌ではなかったけど、オーケストラとソリストなら、ぼくはソリストでありたかった。

それと、ぼくの思いの中にあるのが、子どもたちだけが喜ぶ人形劇をやりたくないということなんです。芝居の最初にお客さんに向かって「こんにちは」と言ったとき、大人にもちゃんと届いてるか。それが大事。大人は付き添いじゃない。大人も子ども人形劇のお客さんなんです。

そういう事を思うようになったのは、地域公演などを経験したからかな。  
**大人と子どもが全然違うところを面白がってくれるのが面白い。**

うちの子は私と一緒にじゃないと観れないんです！って子どもを離さないお母さんがいた。でも人形劇が始まると子どもは、お母さんからぴゅーっと離れて一人でちゃんと観る。帰りにお母さんと子どもが感想をお互いに話すと、それぞれ面白かったと思うところが違う。うちの子は私から離れないんです、なんて言ってたお母さんが、子どもと自分が違うことに気づく。人形劇を観る事は子離れの運動でもあるね（笑）

最近も経験したことがあってね。ショックなことだったんだけど。ぼくのことをずっと応援してくれている人がいて、「ねずみのすもう」と「へっこきじっさ」を、もう何十回も観てくれているんだけど、ある日の公演後、その人に「西川さん、今度はね、稽古してきてください」と言われたんです。

——— それは、厳しい…。

でも、そうかって思った。ぼくは引き出しに入ってる芸で、ただやってたのかも知れない。その人は毎回、何か発見をしたかったんだと思う、僕の芝居を観て。これは、ぼくの責任だと思いました。

——— なるほど。厳しい指摘の受け取り方からも、西川さんの、もっと変化していこう、チャレンジしようという意欲を感じます。

今まで色々芝居作ってきて、ぼくに対してダメ出しが出るのがほとんどなかった。だけど、今やってる「ヘルン氏のこわいかこわくないかわからない話」は、演出の木村繁が厳しい。人形下ろすときさえ「下ろすとき（人形が）死んでますよ」という。厳しいんだ。

でもダメ出されるということは、いいことですね。恐い反面、ものすごく刺激的。こんな70いくつになっても一緒なんです（笑）

インタビューの質問ひとつひとつに真摯に答えてくれる西川さんは、現在も人形劇への情熱でキラキラと輝いていました。

西川さん、どうもありがとうございました！

レポート：長谷川友香